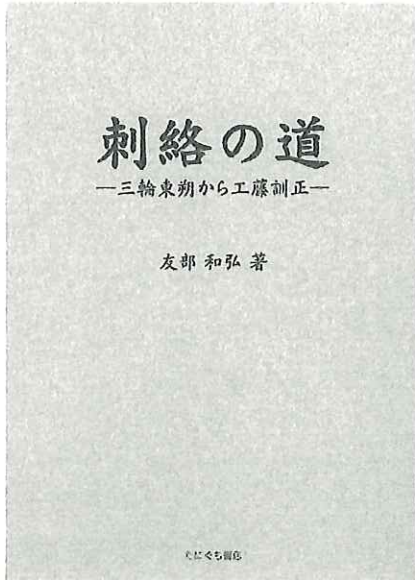


友部和弘著

『刺絡の道——三輪東朔から工藤訓正』

茨城大学名誉教授 真柳 誠

旧知の友部和弘氏から標題の書を先週いただいた。手にしてみると、とても有意義かつ興味ぶかい。附録の影印部分をのぞいた本文がA4判で一二〇頁強あるのだが、二日間の休憩時間で斜めよみしてしまった。そもそも友部氏とは三〇年来の友人で、私が北里東医研の医史学に在籍した十数年、後半の六、七年は一緒に研究してきた。連名での学会発表と共著論文は一〇本ほどある。のみならず二人はおなじ沿線の駅をつかうので、



彼が北里にきた日は帰宅途中のどこかで一杯をくりかえしていた。本書をいただいたのも、彼の家ちかくのそば屋で焼酎をやりながらだった。という縁だけで本書を紹介しようというのではない。有意義で史料性が高いにもかかわらず、購入しやすい価格ゆえ、ぜひ本協会員にも一読して配架いただきたいからである。まずは目次を紹介しておこう。

第一章 三輪東朔の著述とその伝記

第二章 三輪東朔の伝記考

第三章 瀉血療法の歴史と「刺絡名家」収録人名・書籍

第四章 刺絡の歴史に関する研究

第五章 中神琴溪の刺絡抜粋

第六章 三輪東朔と工藤訓正の刺絡

第七章 刺絡講義録

附録 三輪東朔の著述『薬真途異語』『施本大和医語』『刺絡聞見録』『三輪氏家蔵方妙薬集』の原本影印

Amazonをみると刺絡関連の書は二〇をこす。それらの書名

からすると内容は効果や方法が中心のようで、「自分でできる」：「元から治す」：「難病を治す驚異の」などを題した半数ほどの書は患者むけらしい。一方、本書の特徴は第一に、東洋医学会や医史学会などで発表した研究に基づき、瀉血と刺絡の歴史・適応・効果など諸面を論述する。すべてが日本や中国の古医籍をひとつひとつ丹念に調査し、検討した結果からなる。

それゆえ私には有意義かつ興味ぶかかった。とはいえ、かたく
るしい論文集でもない。全文にわたり括弧づけの注記や西暦な
どの補足があり、平易な文体ですらすらよめた。

本書は第二に、三輪東朔（一七四七～一八一九以降）と工藤訓
正（二九一八～一九八九）、および刺絡療法への愛情にあふれてい
る。学術と歴史を論述していてかたくるしくないのは、この愛
情を自然にかんじるからだろう。友部氏は工藤訓正先生と姻戚
関係があり、指導を直接うけた経験がある。工藤先生も三輪東
朔をたかく評価し、東朔の『刺絡聞見録』の注釈を出版してい
た。それらが二人と刺絡への愛情の根底にあるのだろう。工藤
先生は矢数道明先生の初期の門人だった。道明先生の晩期に入
門した私は、門人会の温知会合宿で工藤先生の盃をこわごわう
けたことが何度かある。工藤先生も本書の出版をさぞや天上界
でよろこばれているにちがいない。

第三の特徴は本書の史料性にある。それは三輪東朔の原本を
全文、書末に七七頁にわたり影印附録すること。大多数は工藤
先生もご存知なく、近年になって見いだされた。その研究課題
が第一章である。もうひとつの史料性は、本書全体で論述され
る古医籍の書誌と医家伝にある。後世方・古方・和方・蘭方・
漢蘭折衷の医家が瀉血を併用し、その多彩ぶりには驚いた。瀉
血部位や使用頻度なども調査していて、実証性が高い。これゆ
え人名・書名索引がないのは残念に感じた。再版のとき増補さ

れてはどうだろうか。

第四の特徴は、友部氏が刺絡を専門とする針灸の臨床家であ
ることに由来する。その視点が全書に反映されていて、とくに
工藤流刺絡と静脈瀉血のちがいにくわしい。本書最後の第七章
は氏が針灸学校で長年講義した記録で、臨床家の面目躍如たる
ものがある。同時に本書全体のわかりやすい要約ともいえ、あ
るいは第七章を最初に、あるいは第七章をよむだけでいいかも
しれない。

本書を手にしたとき、学術書なのに書名に「道」があるのは
なぜ？ という違和感がすこしあった。しかし読了してわかっ
た。以上の各特徴を象徴するのが「道」なのだろう、と。本書
の一読と、史料性ゆえの配架を推薦する所以である。

（医博・文博・〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町518-14）
〔たにぐち書店・A4判、213頁、本体3,500円（税別）〕